

センター夏まつり 2012 を開催します

毎年恒例のセンター夏まつりを8月25日（土）に開催します。

内容は各環境保全団体等による出展、霞ヶ浦クイズラリー、投網教室、研究室一般公開などのイベントのほか、環境保全に取り組む市民団体等による環境フォーラムを開催する予定です。

今回はセンターの湖沼環境研究室と大気・化学物質研究室の各研究室も出展を行う予定で、前回とは若干趣向を変えた構成も企画しております。

また、昨年に引き続きパートナーブースが出展されることとなっております。前回はお子様を中心に大盛況でしたが、今回も大いに盛り上がることを期待しております。

当日はパートナーの皆様のご協力をいただき盛大に開催したいと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

(センター：高橋)



パートナー霞ヶ浦講座の開催について

パートナー企画部会では、パートナー活動の更なる充実及び環境保全活動推進の一環として、パートナーの知識の習得、スキルアップを目的に開催しております。

当講座は平成 22 年度から開催しており、今年も引続き実施することに致しました。

初年度講座では、霞ヶ浦の概要から始まり、歴史、植物、魚類、野鳥について、そして昨年度はセンター研究室的の調査研究計画及び調査研究について開催し、参加者から継続して欲しいとの要望を数多くを頂いております。

今年度は、講座内容の切り口を少し変えて、従来の座学による講座から現地見学を主にした講座として開催致します。

昨今、再生可能エネルギーの重要性が再認識されている折、風力発電施設、バイオ施設、水環境施設等の見学をセンターのご協力を得ながら年4回開催します。

パートナーの皆様には、見分を更に深耕すべく、奮ってご参加頂けるようお待ちしております。

なお、パートナー霞ヶ浦講座の日程及びプログラム詳細は、別途ご案内します。

(企画部会：尾形)

7月16日(海の日)～9月1日(霞ヶ浦の日)は「霞ヶ浦水質浄化強調月間」です。

昭和56年、霞ヶ浦の水質悪化が急速に進むなか、茨城県は浄化対策のために「霞ヶ浦の富栄養化の防止に関する条例」を制定し、同年8月を「霞ヶ浦水質浄化強調月間」と定め各種キャンペーンを開始しました。昭和57年9月1日から条例が施行されると、翌年58年には施行1周年を記念して9月1日が「霞ヶ浦の日」として定められました。その後、8月中とされていた強調月間の期間は、7月「海の日」から9月1日「霞ヶ浦の日」と変更されましたが、昭和56年の開始から現在まで毎年続いています。

強調月間中には、水に親しむ機会が多い夏季に積極的に啓発活動を行い、人々の水質浄化意識の向上を図ろうと、県や市町村、市民団体などが多くのイベントやキャンペーンを実施しています。

センター夏まつりや霞ヶ浦水質浄化ポスターコンクール、霞ヶ浦清掃大作戦などはその一環であり、流域市町村の夏祭り会場等でも、霞ヶ浦の水質浄化を呼びかけています。9月1日の「霞ヶ浦の日」には、霞ヶ浦流域市町村で街頭キャンペーンを行い、強調月間を締めくくります。

水質汚濁の主な原因は、わたしたちの生活排水です。泳げる霞ヶ浦を取り戻すためには一人ひとりの水質浄化意識が重要です。強調月間というこの機会に、霞ヶ浦についてあらためて考えてみませんか？

(センター：中根)

霞ヶ浦と私

霞ヶ浦は、私が物心ついた当時(昭和30～40年代)から、日常の中に存在していた。

当時(昭和30～40年代)は、堤防を越えヨシ原を抜けると、遠浅の砂州に魚網を干す物干し場があり、その辺りは小さな水生生物の宝庫であったので、水温む春の日には柔らかな日差しの中で裸足の指先に触れたタンカイ(2枚貝)を取ったり、サデ(タモ網)を使ってゴロ(ハゼの仲間)やテナガエビを捕まえ、運が良ければヨシ原の中に卵が2～3個あるヨシキリの巣や亀を見つけることができた。今では想像するのも難しいが、夏には堤防下の堤脚水路脇に脱衣場付の湖水浴場が出現し、甘い麦茶が大釜で煮出されていて一日中、水の中において冷えた私たちの体を温めてくれたものだった。

(PTAのお母さん方ありがとうございました。)

今、思い返してみると霞ヶ浦は台風の時でさえ大きな水害があった記憶もなく、1年を通して霞ヶ浦は名前のとおり穏やかな貌を見せてくれていた。ただ一度だけ、夏の水浴シーズンに前日消防団が放水訓練をして、湖底が1mほどの深さに抉れた溝にはまってしまい、水中から太陽のきらめきを見てこれでお終いかと思ったことは鮮明に記憶している。

9月1日は「霞ヶ浦の日」である。この日は、穏やかな湖として認識している霞ヶ浦も時として、厳しい自然の貌を見せる自然の一部なのだということを改めて考え、今、霞ヶ浦は私たちに何を言いたいのか、その眩きに耳を傾ける日にしたいと思っている。

(環境活動推進課長：宮本和彦)



「霞ヶ浦水辺ふれあい事業」をご存じですか？

◆霞ヶ浦水辺ふれあい事業とは

市民、企業、行政による「霞ヶ浦水辺ふれあい事業実行委員会」を組織し、流域住民の水質浄化に対する意識高揚を図ることを目的として、市民参加による様々な実践型の浄化啓発事業を行っています。

◆事業の経緯と背景

昭和50年代、霞ヶ浦の水質は急速に悪化し、アオコの大量発生などが深刻な社会問題となりました。水質の改善には、霞ヶ浦を直に体験することや住民の水質浄化意識の高揚が必要であるとの観点から、平成10年に市民と行政の協働により湖岸にヨシを植栽することから始まりました。

◆活動内容

近年は、湖岸における水草植栽のほか魚類観察会や釣り教室、湖岸のゴミ拾いなどのイベントを年5回開催しており、霞ヶ浦に関わる様々な立場の人々がふれあう機会の提供を図っています。

◆今年度の活動状況

6月2日（土）に「水生生物とのふれあい事業」～池にすむ生きものを観察してみよう！～を開催しました。参加者及びスタッフ51名でセンター池での生きもの観察やメダカの観察教室を行いました。



【メダカとり】



【ザリガニ釣り】

また、7月には水草の植栽イベント開催や「泳げる霞ヶ浦市民フェスティバル」において、釣り教室などの出展を行いました。

◆これからの予定

10月は湖岸の魚類観察会、11月11日（日）には湖岸清掃「53PickUp！」（NPO水辺基盤協会主催）の開催を予定しています。詳細は随時センターのホームページなどでお知らせいたします。皆様のご参加をお待ちしております。

（霞ヶ浦水辺ふれあい事業実行委員会事務局【環境活動推進課内】：川田）

川尻川探索記

6月8日(金) = 第1日目

午前9時半、霞ヶ浦環境科学センターに集合8名が参加しました。天気は快晴です。川尻川の現況探索に出かけるには絶好の日和であります。

河口から 300m ぐらい上流に位置する川尻堰付近はコンクリートで整備されており、川幅は約4mです。

スタート前に各人が縮尺1万分の1の地図を手に現況と照らし合わせ、川に沿って進むには非常に柔らかな畦畔で、とても長靴程度の履物では進むことも出来ない判断でき、最初から躓いてしまいました。地図上で見れば大分上流に、川尻川と交差している道路があるようです。とりあえずその場所までは進んでみたい。しかし、現況は川からどんどん離れているように見受けられます。そこで川の両側を、2班に分かれて進むことになりました。筆者を含む第2班4名は、川の左側を進むことになり、人家近くの道路を進みました。やはり地図と現況は違っていました。歩くこと30分、川尻川に掛かる橋にたどり着くことができました。

他方、川の右側を進んだ第1班の4名が、田んぼの縁の小高い丘の山裾を木の小枝などに捕まりながら道なき道を奮闘している姿が眼に入ってきました。やっと合流できました。そこからは地図に頼らず現地の農作業用道路をさらに上流に向かって進むことにしました。川幅約2 m弱になったところに第二の堰がありました。落差は約2 m位です。これだけの落差があつてはとても魚などの遡上は出来ないなどと思いながら、さらに上流に進むことになりました。年中水が張った湿地帯と思われる田んぼなのに、あちらこちらの畦畔で田んぼに発動機で水をくみ上げています。不思議なことです。しかし、現実は違うのです。川尻川は蓮田にとって、大事な水源だったのです。

途中、新規道路整備の工事中の中を横切ることになりました。そこからは山裾の農道を進むことになりましたが、畦にはアザミの花が色濃く咲き乱れておりました。2km程度の上流まで来ると見慣れた景色に出会いました。以前に散策した「戸崎コース」道路の北側大崎地区まで来ていたのです。歩いた時間は約1万歩90分、日頃の運動不足にギブアップしてしまいました。本日はここまでとし、残りの探索は次回に残すこととなりました。



出発前の記念撮影

6月29日(金) = 第2日目

本日も快晴。5名が参加しました。午前9時半センターを出発し、前回に引き続き更なる源流を求めて川尻川を上流に向け探索開始しました。川幅は、約1mぐらいのままずっと続いていました。

約1km上流にいくとゴルフ場のティーグラウンド脇に出ましたが、整備された排水施設があるので注意して見ると、ゴルフ場の池からの配水管が接続され川尻川と合流していました。その辺から上流は水もきれいで川底に砂利もあり小魚やシジミが見られました。更に進むこと200mぐらい上流に作業小屋があり、その小屋の足元の配水管から流れている水が、本川尻川の源流と思われました。



シジミ



作業小屋とスタッフ

総延長約3kmぐらいと思われます。幸い小屋の持ち主の方(土浦市田村町)から、川尻川の状況を聞くことが出来ました。

「昔の川尻川の源流は、国道354号線の“おおつ野台”近くのコンビニがある付近までありました。現在は川尻川の途中までが埋め立てられてしまっている」とのことでした。現在の川尻川源流は、作業小屋周辺の浸み出した水の排水が源流となって川尻川に繋がっていると解釈できました。

(イベント・記録グループ：山中)

ご近所探訪（8） 旧水戸街道 中貫宿と稲吉宿本陣

ブームに乗じて、近場の旧水戸街道を歩いてみる。前々回訪れた旧水戸街道松並木（板谷）を抜け、6号国道を横断して右方向へ下ると、旧水戸街道中貫（なかぬき）宿に至る。中貫宿は江戸から数えて13番目の宿場にあたるが、実は下りの人馬のみを次の稲吉宿へ継立てする“片継ぎ”の宿場であった。現在、車の往来する街並みには宿場の面影はないが、街道筋の中程に、今から150年程前の「中貫宿本陣」の建物が残されている。本来、本陣とは大将の陣営を示す語からといわれるように、諸大名をはじめ、勅使、宮門跡、公家などの特権階級のための高級指定旅館。水戸街道は奥州中村藩相馬家、常州土浦藩土屋家など12家が、参勤交代のため行列を仕立てて行進した。



中貫宿本陣

中貫は本陣といっても大名の宿泊ではなく、休息するために利用する小休止本陣であったが、本陣にのみ許される屋根つき門、式台（玄関）、書院などを備えている。現在、屋根は銅板で覆われているが、寄せ棟造り茅葺きで、主屋の正面に張り出した唐破風の式台は立派で、本陣建築を今に伝えている。元治元年（1864）、天狗党に焼き打ちされたが、すぐに再建されたもので、江戸時代末期の貴重な建物である（土浦市指定文化財）。現在も住居として使用されており、今回訪問の折は、玄関前に駐車してあったり、布団が乾されているなどの事情で、門外からの見学のみとした。中貫宿内には、街道整備以前から在る延喜元年（901）創建の鹿島神社（明治初め八坂神社と合併）や、文治元年（1185）開基の安穩寺がある。

なお旧水戸街道で江戸時代の本陣が現存しているのは、この中貫宿（本橋家住宅）、次に訪れる稲吉宿（坂本家住宅）、および取手宿（染野家住宅）のみで、いずれも貴重な文化遺産である。

中貫宿を過ぎていったん6号国道に出ると、左の土手に「下稲吉の一里塚」の表示があり、塚らしきマウンドが辛うじて残る。そのすぐ先の「旧水戸街道稲吉宿入口」の看板に導かれて旧道へと入る。下稲吉の十字路を過ぎてすぐ、街道右側に「稲吉宿本陣」はあった。一般の屋敷より一段高く、門構えや堂々たる玄関など、本格的な本陣造り。玄関屋根の上方には領主（常州志筑領）本堂家の定紋「笹りんどう」が付けられている（かすみがうら市指定文化財）。



稲吉宿本陣玄関



稲吉宿本陣

本陣と隣り合わせに旧旅籠「皆川屋」の建物が現存する。旧水戸街道に残る唯一の江戸時代末期の旅籠建築で、茨城県指定文化財である。稲吉宿は水戸街道の宿場として栄え、安政年間（1854 - 1859）には、本陣、脇本陣（本陣の補助的な役割。稲吉宿では本陣の向かい側にあつたといわれるが、今は痕跡もない）のほか、皆川屋はじめ17軒もの旅籠（一般の旅人が宿泊する宿）が軒を連ねていたという（「千代田村史」）。大名一行はもちろん、「娼家が街道に沿って連なり、（中略）そのにぎわいは市を開いた時のようであった」（「漫遊客中編」土浦市善応寺所蔵）とも記されている。また皆川屋の2階座敷には遊びすぎた泊まり客の繰り言や愛しい女達の名前の落書きなどが残っているそう。今、静かな街道筋に立つと、活気ある喧騒の江戸時代の宿場に一瞬タイムスリップしたような気になる。



稲吉宿旅籠「皆川屋」

水戸藩は、藩主が定府（参勤交代がなく、藩主が江戸に留まる）のため、参勤通行がないが、藩士や物資輸送の活発化に伴い、道路整備や並木造成などを積極的に実施した。その結果としてさらに人、物、金の流通が盛んとなり、宿場のにぎわいをも醸成した。稲吉宿は、大名の往来に伴う農民への過酷な人馬負担（助郷）の不满による福田助六の安永の一揆や、武士の林竹次郎と単身赴任先である前出の旅籠皆川屋の下女「いと」との悲恋（相対死）事件など、テレビドラマのような悲劇の舞台をも提供している（当事者の首塚や墓などあり）。

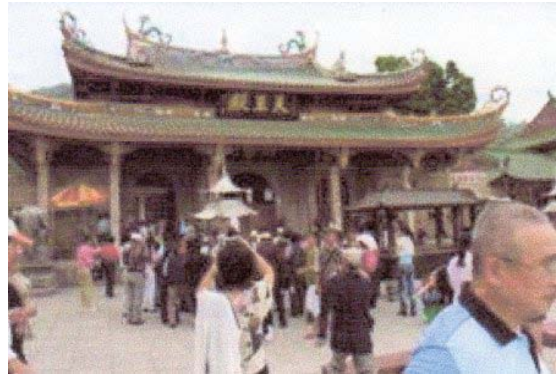
稲吉宿のはずれには香取神社（由緒不明）や、その境内に「者せ越翁（はせおおう）＝芭蕉」の句碑があつた。旧街道はこのあと「千代田一里塚」を経て、次の「府中宿」へと向かう。

（中貫宿、稲吉宿の本陣および、皆川屋の建物の詳細は、それぞれの案内板に表示）

（図書G 細谷 浩）

第2回国際刻字芸術大典に参加して（最終回）

10月9日（日）市内見学



廈門市内見学とコロンス島の鼓浪嶼国際刻字芸術館を見学、この館に永久保存されると聞きました。二階建ての瀟洒な建物です。刻字のみ展示してあります。中国、韓国、日本の作品が常設展示ですね。私の先生の作品もありましたので、記念写真を撮りました。最後に南普蛇寺を見学しました。歴史の深さを感じます。一番奥の建物は修復工事中でちょっとだけ修復の様子を見ることができました。

（パートナー：和知裕善）

ハマナス（ハマナシ）

果実がナシに似た形をしているところから「ハマナシ」という名が付けられそれが訛って「ハマナス」になったといわれます。バラ科バラ属の落葉低木で5～7月頃に紅色の花（まれに白花）を咲かせます。

現在では園芸用に品種改良されたものが育てられており、公園など色々な所で見ることが出来ますが、自生する野生のものは少なくなっているそうです。日本では主に北海道・東北地方の海岸の砂地に群落を作って自生しています。ハマナスの自生南限地帯が茨城県だということはご存知でしょうか。銚田市との境界近くの鹿嶋市大小志崎地区の海岸に自生している一帯が、太平洋側におけるハマナス分布の南限地として大正11年3月8日に国指定の天然記念物に指定されています。なお、日本海側の南限地として鳥取県鳥取市白兔海岸が同時に指定されています。

5月末に散歩の途中、立ち寄って見ました。指定地は鹿島灘の波打ち際より60mほどの内陸部で小高い砂丘を含めて2,234㎡が柵に囲まれています。柵内にはハマナスがチラホラと咲いている程度でハマヒルガオなど他の植物に覆われており、ここが天然記念物の指定地であることを示す碑がなければ見過ごしてしまいそうです。訪れる人も殆どなくひっそりとしております。

海側では昨年の大震災のため防波堤などが崩壊しており、復旧作業が続けられています。自生地は影響がなかったように見受けられますが、海岸の状況の変貌が“縮小—消滅”に進行するといわれており心配です。その他の土地でも災害の影響を受けている植物天然記念物なども多いと思われそうですが、かけがいのない自然遺産を後世にひきついで行けることを願っております。

（パートナー：安川）



「パートナー情報誌 香澄」原稿募集

香澄編集部では「香澄」に掲載する原稿を募集しています。内容は問いません。センターでの活動の様子や、趣味など何でも結構です。写真も大歓迎です。原稿はパートナー室のメールボックスに投函していただくか、編集委員にお渡しください。
（パートナー情報誌「香澄」編集部）

【編集後記】この3月から、市の健康保養施設「元気館」に毎日通っている。インストラクターの指導を受けながらの30分のストレッチのあと、サイクルマシンで大汗をかき、腹筋、プッシュ、牽引などの筋トレマシンをトライ。最後に風呂に入って汗を流す。このお陰だろう。胸の筋肉がいくらか膨らみ、わき腹のぶよぶよは全くなかった。古いズボンをはいての推定で腹囲は10㎝程度縮まった。前立腺肥大の症状も緩和されたのは単なる気のせいかな。(H)